

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

三 谷 正

(一) 序

(二) 科学者パラセルサスとその神秘主義

(三) 人間的なパラセルサス

(1) 友の友情とパラセルサスの情熱

(2) 壮凶の挫折と苦悩

(3) 永遠の生命の認識

四 結 び

(一) 序

ロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉の劇詩「パラセルサス」〈Paracelsus〉の主人公パラセルサスは化学者、医学者として当時の多くの学者の独断的因襲的な態度に飽き足らず、従来学問の最高権威とされた幾多の書物を投げ出し、広く山野を跋涉し、自然を学問の最高権威と考え、自らの学ぶべき最良の書物は自然であると主張し、自然を直接観察することにより、多くの発見を遂げ、近代化学に革命的業績を残した。また、一方、自らの発見せる化学上、薬学上、医学上の薬品は、その重要性を外面よりも内面に置き、内面に存在する生命力の人生に於ける重要性を主張した神秘主義的哲学者でもあった。そこで、(二)に於いて、主として実在の人間としての化学者、哲学者パラセルサスの人と思

を述べ、(三)に於いては、劇中にあらわれたパラセルサスの人間味に触れたのである。普通、科学者、哲学者と言われる人は、兎角、人間としては、冷たい非人間的の面が濃厚である。然るにブラウニングのこの劇に描く科学者且つ哲学者のパラセルサスは人間味豊かな生きた人間となっている。パラセルサスのこの人間味が、友の友情を廻^{めぐ}っていかに生き生きと描かれているかを探り、且つ、この劇の荒筋を辿り、劇中の詩的な句を鑑賞しつつ、劇中の一人物、パラセルサスの友なる詩人アプリーレの芸術観に私見を述べ、更に、パラセルサスが科学者として、科学的智慧によって物象の外面的知識の追求をなすも、結局に於いては、神秘的哲学者の面から、生命感的智慧により、生命の神秘に触れ、かれの求めてやまぬ絶対的知識の追求は永遠の生命に触れることにあったことに言及したのである。

(二) 科学者パラセルサスとその神秘主義

ブラウニングの劇詩「パラセルサス」の主人公パラセルサスは一四九〇年から一四九三年の間に生れたとされている。父はスイス系ドイツ人の医者でウィリヤム・ボンバスタス・フォン・ホーヘンハイム *William Bombastus von Hohenheim* といわれた。この父が最初に開業した小さな町をアインジューデルン *Einriedeln* と言ひ、チューリッヒ *Zurich* の近くにあった。母は父と結婚する以前、この町のある病院の管理の仕事に従事する婦人であった。パラセルサスの本名は *Philippus Aureolus Theophrastus Bombastus ab Hohenheim* であったが、父が息子(意)と気まぐれに通称としたらしい。父及び町の僧正の幾人かから錬金術、外科医術、薬学の初歩を学び、後、バーゼル *Basel* 大学に入學した。やがて、魔術、錬金術、占星学の偉大な達人であり、神智学者 *Theosophist* 及び神秘論者 *Mistic* として当時第一等の学者で、ヴュルツブルグ *Wurzburg* の大修道院長トレスミュース *Trithemius* に就て学んだ。しかし当時は、エドワード・バード *Edward Berdoe* の言う歐洲思想の氷河時代 *glacial period* で、哲学も、科学も、教会によって支配され、人間はすべて慣習と因襲の土隸と化し、人間の知性は凍結状態にあった。然るにこの頃、印刷術、火薬、太陽系、新大陸等の発見があり、これが慣習と因襲の土隸化、教会の束縛からの、人間解放に手をつけることとなり、遂にマルティン・ルーテル *Martin Luther* の宗教改革の叫びとなった。ルーテルよりわづか十才の若さのパラセルサスはこれに心動かされ、錬金学者、占星学者の独断的態度、及び、それらの学者の、過去の書物のみを最高權威とする因襲的

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

態度を快しとせず、直接自然に触れ、自らの知力と努力により、地質学を究め、採鉱をなし、亜鉛、蒼鉛を発見し、水銀、アンチモンの薬学的利用の道を開いたのであった。これは、ルーテルの宗教界になした解放を科学の世界になすこととなったのである。それがため、かれは Luther alter (姿を変えた) と呼ばれ、近代化学の父と称えられた。かれが科学者として実践した因襲に囚われない独自の、自由な学問の研究は、かれ以前にはなかったものである。それ迄は、学問の研究は教会の禁制によって厳しく抑制され、科学、特に医学の分野は過去数世紀にわたって、みるべき進歩がなかったのである。然るに、かれは因襲的、迷信的、中世紀的神学に囚われた師トレスミューズから離れ、自然を直接の対象とする学問研究の道を開いた。かくて、かれが自然を学問研究の対象として諸国を放浪するうち、過去の書物による知識よりも、自然より直接かれが獲得した材料を用いて行った実験の結果の方が、人間の生活に、より有益なもののあることを覚り、ここに金属より得た化合物を生理学、病理学の見地から、人体治療への有効性の実験をなし、その結果、亜鉛、水素のみならず、いたみに苦しむ人間への最も恩恵となるアヘンチンキを発見するに到ったのである。かく、かれが当時の学者の独断的態度と過去の書物を最高権威とする処に不満を抱き、自らの取るべき道を自然から直接学ぶことにあるとなし、学むべき唯一の書物は自然そのものと考えた点は、近代的科学者の面目躍如たるものがあり、近代精神の保持者と言えるのであった。また、かれの交る人間は、都市の教養ありげの人士、僅少の学問を振りかざす偽学者などではなく、自然の中に住む鄙の人、牧人、浮浪者であった。これは、後者のものの考え方、ものの見方が、前者よりも、かれの研究に重要性をもつものと考えたからであった。この考えは、平凡なもの、卑近なものもつ意味の重要性を尊重する近代精神に通ずるものであった。かく、パラセルサスは近代精神を把握した科学者、しかも革命的な科学者ではあったが、一面また、当時によくあった神秘主義的な面があったのである。今、平凡なもの、卑近なものに、かれはもの的重要性を見出したと言ったが、この平凡なもの的重要性を見出さんがために、かれは遠くダットン地方サマルカンドまで足を延ばすのであった。そして、それらの地方に於いて、仏教に触れ、東洋の哲人と交り、ここに玄妙さを身につけるに到り、かれの医学が、人間と宇宙に關係する神秘哲学と密接に結びつくようになったのである。ブラウニングはパラセルサスのこの点を把えて、科学的知識を追求すると同時に、哲人として非科学的知識、論理や理窟では把握し得ない知識、即ちマーガレット・エル・リー〈Margaret L. Lee〉の言う絶対的知識〈Knowledge absolute〉を追求するパラセルサスを創り上げているのである。このパラセルサスの学問の研究態度は一種の神秘主義と言べるのである。パラセルサスは言う。人間の肉体は、その根源に於いて、自然に依存する。従って小宇宙〈Microcosm〉即ち人間社会は宇宙

宙〈Macrocosm〉に依存すると。そして、これを確信を以って断言するのであった。これは、かれがプラトン哲学、ヘブライ神秘哲学、古代東洋の聖典、特にバラモンの聖典に通じていたことを示すものである。これらの教義は従来、ある意味に於いては、迷信的な取扱いを受けていたものである。しかしパラセルサスは、これらこそ、将来、真の科学の基礎となるべきものと考えたのである。それ故、かれの化学上の、或は医学上の実験がこれらの教義と奇妙に湿り合っているのである。また、かれは大胆にも、魔術は善良な庶民の心を制御する人間最高の力を持つものであり、錬金術は人間の可能性を人間に知らしめ、あらゆる物質の中に秘められた力の発展を人間になさしめる偉大な役割を果すものであると主張するのであった。この主張は、従来の陳腐な学問の方法と理論に計り知れない刺戟をあたえたのであった。これら一連の神秘的なパラセルサスの考えの根底をなすものは、プラトン派の哲学者、ヘブライの神秘哲学者、バラモン学者と似た考えである。即ち物質的な宇宙は永遠の心〈Eternal mind〉のあらわれであり、見えざる神の見える姿であり、一方、目に見えるこの世界即ち大宇宙は人間の小世界即ち小宇宙に起るものに応じて大いなる進化の過程をたどるものであるとするのであった。ここに、大宇宙即ち自然と人間の間に感応性があるとすると、から、かれの医者としての治療は、自然と人間との間の感応性を基礎としたものとなった。今日の自然療法と称するものもこれに通ずるものではないか。また、パラセルサスによれば、死んだ物質というものはあり得ないとする。物質はすべて内在的精神、かれ流に言えば、一際のものに充滿し、浸透する宇宙的溶液〈Universal Solvent〉によって生命を吹き込まれている。従って病氣とか、死というものは、この生命力、即ちアラビヤ人が錬金術の最高の秘訣〈Supreme Secret of Alchemy〉と呼ぶものが、人の目につかない状態のことなのである。ここからパラセルサスは錬金術師が捜し求めているところの卑金属を黄金に化すといわれる賢者の石〈Philosopher's Stone〉及び不老不死の靈薬〈The Elixir of Life〉の神秘的な力をも認めたのであった。ここに賢者の石とか、不老不死の靈薬の神秘的な力を認めたと言えば、従来パラセルサスが迷信を打破し、過去の因襲的思考方法を捨てた近代的な態度と一見矛盾するかに思えるのである。しかし次に示すかれの事物を見る根本的態度をみれば、その矛盾でないことが理解されるのである。パラセルサスには、一際のものを見るに際し、ものの外面よりも内面を見ようという根本的態度があった。この態度は、例えば、かれの信仰と人間観の問題に少しく触れれば理解されるものである。かれによれば、神への信仰は、ただ慣習的、因襲的、儀礼的な方法、また、形式的な方法によって、ただ信じようとするだけでは真の信仰は得られない。無知の信仰は真の信仰ではない。無知の反対は知ることである。知るといふことの裏づけあってはじめて真の信仰となる。ここに知ることというのは、人間が内面的

に神を知ることである。人間が心のうちに神の叡知を受けることである。これがかれの信仰であった。また、かれの人間観、即ちかれの見る人間、かれのみる真の人間とは、外面的な、物質的な、客体的なあるがままの人間ではなくして、人間の心が内面的に、主体的に、神聖な霊と結ばれた人間であると言うのである。ここから既に述べたように、物質はすべて内在的精神をもったもの、言わば、その内部に隠された心をもつと考えたのであった。かれが医者として、当時の多くの医者が不潔な調合済を用いたに対し、チンキ〈tincture〉を用いたのは、チンキは万物の内面にある生命の元、即ち活力そのものであると考えたからであった。かれは磁石を見ても磁石は鉄を引きつけるものと、ただ外面的に見るのではなく、磁石は鉄を引きつける外面的な力以外に、隠された別の力、即ち生命力をもっている。従って、生命力のある一つのを、その生命力を引きつけようとする別の生命力をもったもの、これが磁石であると考えたのである。

ブラウニングはパラセルサスのこの神秘主義者の面を把えて、科学的知識の追求もするが、更に一層非科学的な知識、即ち絶対的知識、言わば生命感的智慧（大手前論集第二号の拙論
生命感的智慧とイギリスロマン派詩人参照）によって得られるものを追求するブラウニング独特のパラセルサスをこの劇の中で創造したのであった。エドワード・バードは言っている。「ブラウニングが極めて親しみをもち、最高の玄妙さを以て、この詩に表現せる神秘性は処を得たといふべきである」と。

(三) 人間的なパラセルサス

(1) 友の友情とパラセルサスの情熱

パラセルサスは近代的な化学者、従って近代的な科学者であったが、一面絶対的知識追求の神秘的な哲学者でもあった。かれは科学者、哲学者として、一途に知識追求をなした結果、真理のためには世事一際を省みない冷たい浮世ばなれの点が目立つのである。しかし仔細にその言行を検討するとき、冷たい態度、冷徹な思索の裏に、血の気が多い生きた人間、しかも欠点の多い凡人としての人間的なパラセルサスの姿が見出されるのである。特に、その若い頃の絶対的知識追求の情熱に燃える姿は、赤い血潮の漲る人間そのものである。

パラセルサスは令十九才。青春の情熱燃えてやまず、絶対的知識追求の夢を若い胸に托し旅路につくにあたり、ある秋の夕、友の牧師フェスタス〈Festus〉及びその友であり、後にその妻となるマイケル〈Michael〉とヴェルツブルグ郊外の庭園で語り合い、己が学問研究のために

は、今迄の友情は今宵限りとしたきことを宣言する。かれの強引な別れの言葉を聞き、女性のマイクルは涙を流す。これを見てパラセルサスは、

「一滴、また、一滴、涙を流す。

かの女の仕草、兎戯に似たり。

泣くなかれ、われ、汝が与えし友情に満足せり、否、満足以上なり」

と言ひ、マイクルの名残を惜しむ女々しさを責める。しかし、かれはマイクルをかく責めながらも、今迄の友情には感謝し、且つ自らの二人に對する友情に就て言う。季節の移りかへるの常として、秋が冬に席を譲る如くに、己が知識追求の旅のためには、友情もその席を譲らざるを得ない。さればとて、今迄の二人に對する己が友情を責めざらんことをと。そして言う。

「秋、無音の訴えに、

その衰退への歎きを知れり。

されど、見よ、美わしのマイクルよ、

葡萄の實の房々と低く垂れたる

葡萄蔓の色づき頂垂れたる

いづれも珍重に値するなれ。

果実もて撓み軋る木をも亦

責めることなからんことを」

と。マイクルはかれの心情を素直に受け容れ、

「実に、今迄、心の蟠り更々なく、

仕合せそのものなりしものを」

と言う。パラセルサスはこの仕合せの言葉を取り上げ、以後はその仕合せをフェスタスと共にせんことをと、

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

「以後も然かあらんことを。

強く結ばれし御身二人よ、

われ、かく言うを信ぜよ。

御身二人は、互のために生れしなり。

御身達、その髪の色は異れど、

共に交るそのときは、

一つの色となるならん。

御身達、この鄙の地、否、

いかなる土地にあらんとも、

互に堅く結ばれて

共に仲よく暮されたし。

われ、遠く異境の土地に離るとも

わが行末の幸の祈り戴かば

ただその一事、

わが心、喜びに満つなり」

と二人の幸福を希う。やがて日は西に没し、暗くなる。パラセルサスは周囲を見廻し、且つ遙か彼方の空に目をやる。これを見てフェスタスは言う。

「今、オーレオール、

汝のあたり見廻すその眼をば、

しばしが間、落着けくれかし。

今宵、少くも、

汝、われらのものなり、

汝、マイクルと語り、

マイクル、汝を錬める間。

汝、自らの愛するものを、

自ら進みて残し去るとは、

われ、思わざりき^⑥」

と。しかしフェスタスは一瞬後、更に言う。

「されど君のそのまなざし

わが夢を破りすてたり。

君のそのまなざし

眺めやるところ

いづこも星の光

あるに似たり。

君の眺めやるところ

いと輝きあるに比すれば

ここ、ヴェルツブルグ

教会と尖塔、花園のかこい、

その他、諸々のもの、

ここにあれども

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

その輝きいかに鈍とんきか^①

と。ここにフェスタスの言う星の光とは、パラセルサスの内心の星の光をあらわすものである。パラセルサスが内心に抱き持つ決意の星の光を指すのである。パラセルサスは夙に考えていた。今日かれの住む世界は無知と暗黒の世界である。今や、この無知と暗黒の夜から学問の暁へ、学問復興の夜明けへと、光り輝く星の出ずべきのときである。古い権威は最早や支配するを得ない。今こそ、若き学徒の立ち上るべきのときである。若き学徒は自らの知力を以て、より高き、より深き学問の追求に従うべきである。パラセルサス自らも、師トレスミュースの僧院、陳腐な書物を捨て、遙るか異国に、また、広大な自然に知識を求むべきである。しかし、今、かれの目ざすこの偉業は未だ知られざる未来に属し、現在では、ただ微かな見込みあるにすぎないものである。けれども、この偉業は、かれの運命であり、心ある世の人の求める最善のものであると考える。そして、今、胸中深く、これを眺め入っていたのであった。然しながらフェスタスは尚も、惜別の情に堪えず、パラセルサスはあまりに夢に耽溺し、無謀の企てをなすものなるを告げ、旅路に着くを断念させようとする。けれどもパラセルサスは強い自信を以て言う。

「否、われに恐るべき何ものもなし。

誰か知らん、わが魂の深奥の秘密を。

今、もし誰か、わが心の秘密を知るとも、

われに於て何かあらん。

今、わが強き欲情、

わが内なるわが意図を蔽い隠くすことあらんも

われに於いて何かあらん。

今、わがただ独りなる旅のはじめに、

光弱まりて、いと暗かき陰かげ

わが道を阻まんも

われに於いて何かあらん。

今、わが負える真正の使命の確証に、
この激しき氣力に、
勝るもの果して何ぞ。

奮闘すること、これわが天性、

生れながらのわが性質、

わが前途、永久にわたりて、

成功の見込なからんも、

霰、われに荒れすさみ、

わが行方、道なしと、

われを誘うことあらんも、

わが胸に生きづく、

休みなき、はた、押えがたき、

この力、

この力、無視しては、

わが託すべき、輝かしき運命、

いづこにあるや、われそれを知らず。

かかる刺戟、

これを起こすは、人の意志ならずや。

この刺戟、いかにして、

われ、無視するを得ん。

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

今、われ、御身らとともにありて、

何をかなし得ん。

御身らの愛、御身らの心遣い、

これらの中に安住して、

われ、何をかなし得ん。

われ、われ自らの生活にありてこそ、

われ、事をなし能うなれ。

神、自らの与え賜いし力、

無駄に終るを望み賜うことあらじ。

問え、大鷹に、

何が故に、広漠たる前人未踏の深淵に、

急飛翔し降るかを。

問え、大鷹に、

何が故に、生れ出でしはじめより成熟せるの力、

そを活気づけしかを。

問え、大鷹に、

何が故に、沈黙、無限の天空を強く打つ力、

自らに備わるを不思議と思わざるかを。

心せよ、神、必須のものとは、

断じて醉生無死せざるものなるを」^⑧

かく、パラセルサスは神の大いなる負託あるが故に、その負託に答えざるを得ないと言う。けれども、フェスタスは、尚も、パラセルサスの学問の方法を非難する。先人の踏み来りし学問の道を捨て、神が人間の無謀の侵入を禁ずる紛糾の密林、道なき荒野に敢て進むは高慢であり、自信過剰である。神の負託に答えるとならば、神の定め賜いし道に沿うべきである。学問の普通の人の踏むべき道に従うことこそ神の意志に答えるものなるを説く。これに対しパラセルサスは言う。かれの精力の絶倫なるは神がかれに力を与えし証拠であり、且つ、かれの胸に燃える新しい希望は、かれに生気を与えたのである。今や、かれの頭上には、新しい光が白みはじめていると。そして言う。

「フェスタスよ、われは若く、

幸ありて自由を有す。

われ、われの一身を捧げ、

わが生命を与え得るなり。

われ、このために撰び出されし、

ただひとりものなり。

思え思え、広漠たる東の国を、

すべての智慧のほどばしり出づる処を。

輝かしき南の国を、

すべての智慧の住める処を。

希望に満てる北の国を、

多くの人には見逃がされおれど、

われには光を投ずる処を。

今こそ、新しき希望の、

世に生気を与えるべきの秋ときならん。

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

今こそ、永きにわたり押えられ、

忘れ去られし人類に、

新しき啓示の、より新しき光の、

明け出づるの秋ならん。

この今のときまで、

われらのためにとっておかれし天つみ空、

その光彩に、われらあまりに慣れしため、

われら、その光彩に盲目たりしぞ。

されど、曇りなき灼熱の焰に直面するの情熱あるもの、

また、その光彩を探ぐるの旅を祝福し、

浮世の生活を栄光もて包まんを望むもの、

これら熱情ある探求者を、

この今の今まで、

世の人のために、とっておかれし天つみ空は、

この探求者を拒むこと、

いかにしてあり得んや^⑨」

と。けれども、フェスタスは飽くまでも言う。真に学問をするとすれば、学問の都に行くべきであり、荒れ海を渡り、荒野に行くは愚かである。学問で栄え、学問で有名なローマへ行け、或はアテネへ行け。その両者ならば、正しい学問を身につけ得られるであろう。未開の地へ行くは道に迷い、身を害うに過ぎぬであろうと、パラセルサスの無謀を説くこと切である。けれども自らの内に燃える知識追求の情熱、新しき学問の道に志す熱に燃えるパラセルサスは自らの焰を抑えきれずして言う。

「なつかしきフェスタスよ、

汝のわれに希うは何なるか。

わが心の追求せんと欲するものを放棄し、

わが生きる唯一の目的を打ち捨てて、

神の大きいなる負託をも拒み卻けて、

かくて、われの死して果てなんを希うものなりや」^⑩

と。更に、パラセルサスは、かれの追求せんとする知識への憧れは、神意理解への憧れであることを述べ、尚、言葉をつづけて、
「われ行かん、わが心を試めさんために。

われ、わが道を知る、

鳥、道なき道を知るが如くに、

われ到り着かん。

されど、いづれの時なるや、

また、いかなる廻り道するや、

われ、そを問わず。

されど、神、もし、われに、

霰、目を暗くする火の玉、

寒、息窒せる雪を送りて、

われを悩ますことなければ、

いづれの時か、神嘉し賜うの時、

われは到り着かん。

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

神、われをも、鳥をも、

導き賜わん、神嘉し賜わん時に^⑩

と言ったのである。されど、フェスタスもマイクルも、尚も、これは、パラセルサスの心の迷いにすぎない。友を捨て、友情を無視して無謀の旅をなすは余りにも利己主義である、身勝手であるとする。フェスタスは言う。もしパラセルサスが、神より、かれの言う如き偉業を与えられたとすれば、友の愛によって、かれは囲まれるべきはづであり、人間としての幸福から自らを切り離すことをなし得るはづはない。神の撰びしものにして、愛を知らざるものの存在は有り得ないと言う。やさしい心の女性マイクルも、パラセルサスに、野望を捨てんことを切に促し、かれの今夜の言葉は高慢の一語に尽きると言い切るのである。これに對しかれは言う。人生の快樂も、二人の友の口にする愛も、かれは軽々しく捨て去ろうとしているのではない。その行動のすべては自らの信念から生れたものであるとて、

「真理はわれらの心のうちにあり、

われら、心の外なるものをいかに信ずとも。

真理はわれらの心の深奥にありて、

充溢せるものなり。

われらの外なる卑しき肉体、

壁また壁を築きて、これを囲む。

また、この肉体、われらを迷わし、

邪道に導く肉体の網を張る。

これらの肉体の意図を挫き終らせ、

その障害を貫きて、完全に、明瞭に、

生命を認める力、これ真理なり。

知るとは、

われらのうちに閉ぢ籠る、

心の光彩を洩れ出だすべき、

道を開くことにあり、

外にありと思われる、

光を呼び入れしむるにあらざるなり」^⑩

と。即ちわれらの心のうちであって、万象の根源にある生命を認め、その映れる心の光彩を洩れ出でしめるが、かれの希求してやまぬものなるが故に、かれは決して神に挑戦するものではないと言うのである。パラセルサスのこの言葉によって、フェスタスとマイクルは、人間が真の人間性によって立てば、天使を凌ぐものであると信ずるに到るのである。言わば、パラセルサスは、真珠を求めて海底に飛び込むこととなる。かれの友はその浮き上るを待つのであった。

(2) 壮図の挫折と苦悩

パラセルサスは東奔西走、真理を追求すること九星霜、今、コンスタンチノープルの魔法使の家に弧影悄然として横たわっている。かれは痛ましい心を抱えて自らの業績に就て棚卸しをする。何を得、何を失ったかを。かれは数々の発見をした。しかしかれの努力の結果は断片的なものであった。事実と空想の乱雑な塊かたまりりにすぎなかった。かれが九年前、旅路についたときの、あの希望と隔ることいかに遠きか。かれは歎く。

「時は過ぎ青春は消え、

人生は空なる夢にすぎざるか」

これ、時の声なり。

われらの心臓、母なる人の心臓と共に鼓動し、

われらの舌、母なる人の舌に真似て言葉覚えし、

人生の初めより、

生存の意識あるとき、また、なきときも、

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

永きにわたり、

この声あるを気付かざるなり。

されど、幾年過ぎるそのうちに、

とある経験、われに起りて、

一瞬、この声、われに囁く、

人生無常のこの事実を。

それありて後に、

われらの眉、また、眼、

足取り、さては言葉すら、

変りに変るそのさまは、

無常を知るの証なれ」

と。かれは最早や落ちついて研究を続け得なくなる。かれの使い過ぎた頭脳は、今や、休息を必要とするのである。曾ての夢の達成を期待せる自信も過去の夢と化した。昔のヴルツブルグの友に対する愛もなくなった。唯一の希望は自らの知識追求の努力に対する報酬であった。然るにこれをも未だ得ず、今、病床に横たわる。これ全く、このまま死を与える神の意志にあらざるかと疑う。このとき、かれの耳にするは、一つの声の囁きであった。それは、かれの友の一人アプリーレの声であった。美を愛し、美に憧れ、今この世を去らんとする親友アプリーレの心底より漏れ出づる囁きであった。パラセルサスが絶対的知識を求めながらも、その方法に於いて、ただ知性のみ依存し、しかも断片的に蒐集した知識の乱雑な塊りにすぎないものを獲得したに對し、アプリーレは絶対美を求めながらも、ただ万象に対する愛、美的感情を抱くにすぎなかったのであった。アプリーレは言う。

「わたくしはあらゆるものを限りなく愛し、

あらゆるものに限りなく愛されることを望んだ。

先づ、わたくしは地上のあらゆるものを石に刻み、銅に鑄造することを望んだ。

狩りの名手とて、森の神と崇められる古の狩猟家も、

森の樹の美わしい魂も、

また、明星と紛う青玉色なる霊の化身の妖精も、

白髪の王者にもふさわしき羊飼も、

暴君の道よぎるとき、抵抗の心を抑え、

逸る手を衣服に包み、群る民衆に隠れ立つ若者も、

また、立法者も、

愛のためにと、神の与える輝く香油を身に振りかける白鳥のごと、色白き美わしの女人も、

すべて人の胸より出づる感情、

人の頭脳により考え得られるすべてのものを、

正しき姿に表わし描くことを望むのであった^④

また、

「森林、谷間、岩石、平野、谿谷、砂原、荒野、

波揺れる水面に、曙破れ出で太陽に向いて翔ける飛龍の如く輝く湖、

大海の中なる小さき島々、その島見つけ、

幾回となくそれを廻り泳ぎて、屍と化せる鯨を追うつのさめ、

すべてわたくしの頭脳より浮び出るもの。

否、そのみならず、

青銅の迷路、宮殿、金字塔、穴蔵、浴場、画廊、法廷、寺院、高台、市場、劇場、埠頭など人の群るところ、すべての場所、

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

わたくしは工夫して画くことを望んでいた」¹⁵

と。これらの詩句は、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン〈Walt Whitman〉の「草の葉」〈Leaves of Grass〉を想起せしめる。アプリーレは宇宙の万象の一つ一つの美を愛し、それを彫刻に、絵画に、詩歌に、表現することを望んだが、これと同じくホイットマンも万象を愛しそれを詩に詠った。そしてホイットマンは、万象を羅列的に詠うこともあったが、その根本的態度は象徴的であった。象徴的表現は、読者の心を物象の内面に向けるものである。もし象徴的表現でなく、単に物象を羅列するだけであれば、読者の心は物象の外面のみに向う。然るに、アプリーレは物象を、単に羅列的に眺め、そこから絶対的美を抽象することを望んだのであった。われわれの心が物象の外面のみに走るとき、知識に於いても、美に於いても、断片的な蒐集に終るものである。パラセルサスが絶対的知識を求めて、物象の外面的知識の断片的蒐集に終り、アプリーレが絶対的美を求めて、断片的美感に終ったのは、いづれも、方法に於いて誤りがあったためである。両者とも、物象の外面にのみとどまったために、その目的を達することを得なかったのである。われわれが物象を内面的に凝視するとき、絶対的知識を求めるものには、知性に感情が加わり、絶対的美を求めるものには、感情に知性が加わり、ここに知性のみでない、また感情のみでない別の心情に置かれるものである。このときの心情は物象の外面を突き破り、その内面に向う切実な或る願いを抱く心情なのである。言わば根源的に生にかかわる何かを切に求める心情なのである。(拙著「久遠の生命」第二編、第一章参照)この心情にあつてはじめて、絶対的知識及び絶対的美が得られるのである。パラセルサスにあつては、単に科学的智慧によってのみでは絶対的知識は得られず、アプリーレにあつては、単に物象に対し、愛着、美的感情を抱くだけで物象を羅列的に眺めても絶対的美は得られなかったのである。結局、絶対的知識も、絶対的美も生命感的智慧によってはじめて得られるものである。アプリーレが物象に愛着を覚え、美的憧憬にのみ終った点に就き、更に附言すべきは、芸術は表現があつてはじめて存在価値があり、表現は観照なしではあり得ないということである。観照ということが感情を映し出す鏡である以上、一つの知性である。然るにアプリーレは万象を愛しその一つ一つを描く憧れがあつただけである。ただかれの感情の高調だけあつて、これを観照する知性がなかったのである。極端に言えば、かれには、未開人の意味のない絶叫か、野獣の咆哮に類するものがあつたにすぎなかったのである。かれには知性の裏づけのある感情がなかったのである。これが芸術的表現をなし得なかつた理由である。また、芸術的表現は具象的でなければならぬ。然るにアプリーレは物象を羅列的に眺め、そこから絶対的美を抽象しようとした。抽象的では芸術的表現とは言えず、芸術作品は生れないものである。ここから、かれは哲学

者、思索家の道に迷いこみ、ただ苦悶するだけであつたのである。結局アプリーレは芸術家としては失敗したのであつた。

アプリーレは自らの病篤きを知るや、パラセルサスにこの自らの失敗を告げたのであつた。パラセルサスはアプリーレの囁きを耳にし、友の失敗のみならず自らの誤りをも認めるのであつた。そして言う。

「アプリーレよ、以後はわれを愛せよ、

われ、愛することを知るの努力する故に

慈愛深き神よ、われら二人を救し賜え。

われら、夢の里に眠りいたれど、

その夢に疲れ果て、遂に覚めたり。

われらの目前めまへの世界、

暗く、荒れ果てたれど、

われらの手足、足首、

尚も、宝石の飾り残りおれり。

汝なほは愛するを求め、

われは知るを求めたり。

汝は知識を拒み、

われは愛を疎外せり。

汝は常に美に憧れ、

われは知力を憧れたり。

われら遂に目覚めたり、

罪の償いの苦行いかならんとも、

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

われを救い賜わんことを」^⑩

と。するとアプリーレは、最早や臨終と見え、息も絶え絶えのうちに、これに答えて、

「われ、汝の声微かに聞ゆ。

されど、われ、全き暗闇に閉され、

瞬前見えし汝の眼も匿されし如し。

口の利けるこの瞬間汝に言わん。

われ、今、死なんとす。

されど、われ、汝に逢いて嬉し。

ああ、誰か世の詩人よ、

われを憶い、われを誼わんことを。

されど、汝に逢いて、

かく、速く死なんとは」^⑪

と。パラセルサス驚いて叫ぶ。

「アプリーレよ、死ぬことなかれ、

われら割かれたる一つの世界の半ばならずや。

不思議の縁ありて再び結ばれたるものならずや。

別るべからず、決して、決して、

愛を知る汝が知を知り、

知を知るわれが愛を知るまで、

ともに二人が救わるまでは、

聞けや、アプリーレ、

われら、ここに得たるものを、

今こそ用いん。

あな、あわれ、アプリーレ、

かれ、わが胸に寄りて死なんとす^⑧」

と。パラセルサスは一瞬哀傷に包まれる。しかしその後、またも自らの知力を頼り続けるのである。

年移り星変り、パラセルサスは令三十三才。バーゼル大学の教授となり、今や、「人命の施與者、幸運の配給者、大学の偶像^⑨」と称讃され、驚異の医学者となっている。旧友フェスタスは大学を訪れ、パラセルサスの大学教授としての講義ぶり、熱心な学生に取巻かれ崇拜されるを見、その成功を喜ぶのである。けれどもパラセルサスは自らの外面的な成功は認めながらも、心中の悲惨をフェスタスに漏し、若き頃の希望、絶対的知識探求の成就せざるを歎くのであった。バーゼル大学教授の地位は得られた。発見せる薬品により治療に成功を収めはした。幾多の学位、免許状を自らのものにした。エラスムス〈Erasmus〉からはその功績を認められた。教室には学生は群っている。確かに外面的には成功したかに見える。しかし今や高遠な真理探求の理想に代って、取るに足らぬ卑しい快楽を求め、高貴の木の根元の菌類のごとく、その魂に飛び出して来た。大学の教授でありながら、その授ける知識はただ掻き集めの断片的なものであり、しかもそれを受ける学生は低級であり、従って講義は安易なものとなり、ここに自己満足という学問研究上の邪道に陥った。且つ熱心に見える学生も、ただ旧来の学派に対する反対に痛快を叫ぶために蝟集するの輩にすぎなく、また、かれらは生来愚鈍のため、単に新奇を求めて、ただ自らの無知に驚くばかりにて、真理探求の熱意なきため、かれらを蔑視せざるを得なくなる。加うるに、かく門下学生を蔑視しながらも、尚、その内心に於いて、かれらの賞讃をひそかに望んでいる自らの陋劣な心にも軽蔑の念を禁ぜざるを得なくなるのであった。ここにかれは、医者として、科学者としての人類救済の愛も絶対的知識追求の希望も、神によって自らに負託された重荷の畏敬の念もすべて失い、今や、ただ獸性を帯びるばかりとなり、遂には半ば愚昧、半ば狂乱の状態となるのであった。ここに於いて、自らが時代に先んずるを信ずるがあまりに、先人の学者を軽蔑し、侮蔑し、公衆の面前で、イーティウス〈Aëtius〉、オリバシウス〈Oribasis〉、ガレン〈Galen〉、ラシス〈Rhasis〉、セラピオン〈Serapion〉、アヴィセ

ナ 〈Avicenna〉、アヴェロエス 〈Averroës〉 の書物を焼却するに到るのであった。かくしてかれはバーゼルを去り、やがてアロサティア 〈Alsatia〉 のコルマー 〈Colmar〉 の宿に入る。再び知識追求の夢に燃えるのではあるが、手紙をフェスタスに送って言う。バーゼル大学にあっては、藪医者と罵られ、恥辱の身を世間に曝らすこととなった。曾て、かれを尊敬した人達によっても捨てられた。かれの心血を絞って治療に尽した人達によっても弾劾された。ある高僧の生命を救ったにかかわらず、その高僧すら治療費を払わざるのみか、かれの大学教授の地位をも危くする行動に出た。学生はかれに飽き、講義を聴かず、大学の教授達は、かれらの学問の古き方法論に干渉されるを嫌い、かれと疎遠にするに到った。これらの事情のため、遂に意を決して大学を去り、再び若き日の情熱を盛り返し知識探求の旅に出たのである。しかしこのたびは、以前の禁欲生活を以てするのでなく、人生の快楽をも味わい、知識追求と快楽追求とを共にしたい。為し得る一際の人生経験をなし、知り得る一際の知識を知りたいのである。過去の頑な^{かたく}を捨て、快楽と研究を合せする処に、以前と違った成果が得られることを信ずると。かく大学を去った経緯を述べ、現在のかれの心境を伝えた。フェスタスはパラセルサスが高貴な目的を持つ限り、感覚的快楽を放棄すべき警告を送る。しかしパラセルサスはその忠言を受け容れず、相変らず自らの思う俵の生活を続けるのみであった。そのうちマイクルの死が報せられる。かれは一瞬無常感に打たれ、

「マイクルは木の根、露の間に眠っているにすぎない」^②

と本然の自らの姿に帰り、魂の不滅を嘯くのであった。

(3) 永遠の生命の認識

流石のパラセルサスも遂に病魔に襲われる。今、ザルツブルグ 〈Salzburg〉 の病院の一室に瀕死の状態で横たわっている。忠実な友の牧師フェスタスはその傍にあって、夜を徹し見守っている。かれは苛むパラセルサスのために神の救いを求めて祈るのである。パラセルサスは目を覚ます。かれは半ば譫言^{うわごと}のうちに、バーゼルにあって受けた軽侮、即ち藪医者、詐欺師、嘘吐^{うそつき}と罵られた限りなき侮辱を口にするようであった。しかし次の瞬間、再びアプリーレを夢みるようであり、やがては神に祈り、愛を求めるの力を附与されんことを希うものの如くであった。そのとき明瞭な意識のうちにフェスタスの祈りを認めた。フェスタスは種々の祈りを捧げた後、神はその胸にパラセルサスを抱き、偉大な思想家、偉大な開拓者として称えるであろうと結び、次いで静かなマイン 〈Mayne〉 の流れを口吟む。

「かくてマインの川、流れ行く、
わが愛するものの住める処を。

いかなる眠りもなく安らかなるはなかるべし。

流れは芝原を貫け牧場を通り、

先へ先へと廻り曲って進み行く。

その岸辺、いかなることの起るとも、

響くは妙なる音ばかり。

土盛りあがる牧草の原、

雑草、低く刈込まれ、

牧草のみは、風に揺られ波立ちて、

川の流れを眺め入る。

蜂の訪れ堪えかねる、

あまりに、か弱き桜草。

此処に、彼処に、星のごと、

点在するがあるばかり」

と。ここにパラセルサスの心やわらぎ、自らの死期の近づくを知り、過ぎにし数々の思い出が水の流れの如く心に浮ぶ。やがてかれは何かを言わんとて立ち上る。遂に、かれは自らの最初に意図せる(註②の詩句 参照)「永遠の生命に触れるを覚えたのであった。かれには、常に、絶対的知識への熱烈な渴望があった。しかし今まで物象の外面にのみ心を奪われていた。今はじめてかれの心は内面的となり、所期の目的なる絶対的知識の追求が永遠の生命に触れることであるに気づいたのであった。アプリーレの死、マイクルの死、また、自らの死に直面し、かれは生の意識を得たのであった。」(拙著「永遠の生命」第二編、第一章参照) 換言すれば、ここに生命感的智慧によって永遠の生命に触れたのであった。そしてこれに触れ得た喜びは

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

やがてこれへ向っての万象の渾然一体となる愛の喜びに発展して行くのであった。ここにかれば、自らの過去を省み、永遠の生命の存在を知るに到るまでの、自らの不完全な姿を思い浮べ、次のように言うのであった。

「わが心には愛は未だ熟せざりき。

人類の愛の起源を訪ねるうちに、

憎しみも愛の仮面にすぎざるを知り、

悪に善を、失敗に希望を見、

不完全なる推論に、微かなる向上に、

はた、真理への果敢なき戦に、

いと哀れなる過ちに、

或はまた、僻、恐れ、憂い、疑にも、

誇りをもつに足る程に、

わが心のうちに、愛は未だ熟せざりき」

と。更に言う。

「これ、すべて崇高き心に触れるもの、

いかに過ち多くとも、

これ、すべて天に向って翔け上るもの、

いかに弱くとも、鉱坑内の樹々のごと。

鉱坑の樹々、太陽を見しことさらになく、

ただそれを夢み、ただその存在を想像するにすぎざれど、

死力尽して登り行き、

太陽に達せんとするもの、

われ、これを知らず失敗に終れり^②

と。かくして、パラセルサスは、方法に於いて、知識のみを求める結果となった自らと、同じく方法に於いて愛のみを求めていたアプリーレの過ちの経験から、知識と愛、知力と美の感情の融け合った智慧、更にそれに根源的に生にかかわる切実な願いの加わった生命感的智慧の自らの心に強化されんことを希い、

「われと、さきに死せる詩人の失敗に鑑みて、

われ、第三のよりよき魂を鍛え上げんを、人よ見よかし^③」

というのであった。ついでフェスタスに向い、

「免にも角にも、われは励めり^④。

完全には言い得ざれば、

世の人の軽蔑なくしてはあらざれど。

世の人は、わが長所、真実を称えんよりは、

わが短所を拒み、虚偽を侮蔑せり。

そのこと、世の人に相應しきことならん。

されど、臆ては、

われの真価の知らるるの時到来べし。

われ、暫時の間、

恐しき暗雲のさ中に、

身を没することあらんも、

われ、神の灯火、

ロバト・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

わが胸近くに押し当てるのとき、

神の灯火、その光彩、驕て闇を貫かん。

かくて、われ、あらわるるの日、

必ずあるなり。

汝、わがこの言葉、理解わかれしや。

われ、わが言ことすべて尽くせり」

と。これを聞くやフェスタス叫ぶ。

「君逝くや、オーリオール」

と。パラセルサスは、

「フェスタス、わが手を、

この手を、汝が手に、

わが真実の友、アプリーレ、

汝と共に、アプリーレ」

と最後の言葉を残して逝く。これを見てフェスタス言う。

「これぞこれ、パラセルサスなり」

と。

(四) 結 び

(二)に於いて科学者、神秘哲学者のパラセルサスを真正面から眺め、(三)に於いて、同じパラセルサスが科学者、哲学者といった一般学者によく見られる一見特殊なような人間でありながら、いかに普通の人間、平凡な人間、しかも生きた人間として描かれているかを見た。学者、哲人と

してのパラセルサスは、魔術をも人生肝要のものとする神秘的な、寧ろ普通人の近づき難く思われる人間でありながら、かれがブラウニングの筆にかかると、極めて平凡な人間の面、即ちその魔術も、かなわぬ時の神頼みと、困難と不幸に際し、救いの神として縋る弱い人間として表現されている。その他大学教授として一時の成功はするものの、一頓挫を来すと煩悶し、苦惱し、半狂乱となり、また、感覚的快樂に耽るなど、生きた人間の面目躍如たるものがある。けれども、また、かれは、ひとたび、永遠の生命に目覚めるや、真実を追求し、人間らしく生きてゆく主体的な一般の人間と同じく、その死に直面しては、過去の一際の苦惱から救われるかのようにである。これは、天国と地獄の中間の煉獄にあって地上に強く引きつけられながらも、天上を強く憧れるわれわれ凡人の姿そのままである。この故に、ブラウニングのこの劇詩は、これに含まれているブラウニングの深い思想面もさることながら、ブラウニングがパラセルサスという学者を、人間味豊かな、生きた人間として、いかに巧みに描いているかに、劇詩の妙味があると、わたくしには思われるのである。

〔註〕

- ① Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia, p. 313.
- ② Robert Browning : Paracelsus, Book I, II, 23—24.
- ③ Ibid., II, 25—29.
- ④ Ibid., I, 49.
- ⑤ Ibid., II, 50—54.
- ⑥ Ibid., II, 61—64.
- ⑦ Ibid., II, 65—69.
- ⑧ Ibid., II, 328—352.
- ⑨ Ibid., II, 367—380.
- ⑩ Ibid., II, 140—143.
- ⑪ Ibid., II, 559—565.
- ⑫ Ibid., II, 726—737.
- ⑬ Ibid., Book II, II, 43—53.

ロバート・ブラウニングの劇詩「パラセルサス」

ロズ・ブrowningの劇作「クインセルス」

- ⑭ Ibid., ll. 420—434.
- ⑮ Ibid., ll. 450—461.
- ⑯ Ibid., ll. 618—627.
- ⑰ Ibid., ll. 628—632.
- ⑱ Ibid., ll. 633—639.
- ⑲ Ibid., Book III, ll. 14—15.
- ㉑ Ibid., Book IV, l. 686.
- ㉒ Ibid., Book V, ll. 419—431.
- ㉓ Ibid., ll. 873—880.
- ㉔ Ibid., ll. 881—886.
- ㉕ Ibid., ll. 886—889.
- ㉖ Ibid., ll. 895—905.
- ㉗ Ibid., l. 906.
- ㉘ Ibid., ll. 907—909.

参考文献

1. M. L. Lee and K. B. Locock : Browning's Paracelsus
2. Mrs. Orr : Handbook to Browning's Works.
3. Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia
4. Charlotte Porter and Helen A. Clarke : Pauline, Paracelsus, Pippa Passes, King Victor and King Charles
5. G. K. Chesterton : Browning
6. Edward Dowden : The Life of Robert Browning
7. F. M. Cohen : Robert Browning
8. 斎藤勇 ブラウニング研究